９年間を見通した小中一貫教育を活かして自ら伸びようとする児童生徒の育成
～「つなぐ」をキーワードにした、考え、議論する道徳を通して～

檜枝岐村立檜枝岐小学校・中学校　（代表）校長　鈴木　路人　　教諭　吉村　憲治

１　研究の趣旨

本校の児童生徒は素直で真面目な反面、教師の指示待ちが見られ、自分たちで創意工夫しそれぞれの思いや考えを実行しようという姿勢が弱い。そこで⑴「特別の教科　道徳」の実施、⑵本校の教育目標「郷土を愛し、夢に向かって学び続ける子供」、⑶昨年度の研究の成果「つなぐ」の手立て、以上の３点を踏まえ、小中の教職員がその課題に真摯に向き合い、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）を中心として、子供たちが自分の考えを明らかにし、他者の考えを比較検討したり、広げたり深めたりしていく中で、探究心をもって、まっすぐな心で、たくましく社会を生き抜く力を育てていきたいと考え、以下に述べるような仮説を設定し、本主題にせまった。

道徳科を要として、道徳教育の量的確保、質的転換を図り、「つなぐ」の場面を効果的に取り入れ、小中一貫教育のよさを活かしながら、子供一人一人の道徳性を高めることにより、「自ら夢や目標の達成に向かって努力しようとする児童生徒の育成ができるであろう。

２　研究の概要

⑴　道徳教育の量的確保、質的転換

量的確保として、道徳実践チェックシートの活用、年間３５時間完全実施。

質的転換として、授業検討会等による指導理論、指導法の共有化、指導技術の向上。

⑵　「つなぐ」を活かした「考え、議論する道徳」実践研究

視点Ⅰ「子供一人一人が、考え、議論していくための主発問の精選」、視点Ⅱ「子供一人一人が、考え、議論していくためのつなぐの工夫」に重点を置いた授業実践及び授業検討会の実施、互見授業の定期的な実施。

⑶　９年間を見通した指導計画に基づく、小中連携授業の推進

小中９年間を、発達段階を踏まえた３つのブロックに分け、ブロック同士の「つなぎ」を意識した、研究仮説の検証の推進。

⑷　実態把握

数値でわかる道徳の意識調査（学校評価・学校生活質問表等と合わせて）の工夫と結果分析や各種検査（知能検査、ＮＲＴテスト）を踏まえた指導と子供の変容の見取り、ポートフォリオによる子供の振り返りの場の設定と累積内容の分析、道徳コーナーの等の整備と充実。

⑸　道徳教育としての評価の在り方と方法

道徳の教科化に向けた準備と実践、評価の具体的方法の検討。

３　成果と今後の課題

⑴　研究の成果

研究を通して、道徳に対する教師の意識が変化し、授業力が向上した。それに伴い子供たちの意識も変化し、道徳性を高めながら、自ら夢や目標の達成に向かって努力しようとする児童生徒が育まれてきた。それと併せて、家庭や地域とのつながりが深まり、保護者の意識も変わってきている。

⑵　今後の課題

今後は、子供自らの PDCA サイクルの確立を目指して継続した指導を続け、道徳の教科化に向けた準備や評価についてより一層の研究を深めていくことが必要となる。今年度の成果を活かしながら、子供たち一人一人が伸びようと思える教育活動を実践していくことが今後も欠かせない。